

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370167

研究課題名(和文)メディア表象に見る「アメリカン・ファッション」の生成過程研究

研究課題名(英文)The Formative Effects of Media Imagery on American Fashion

研究代表者

平芳 裕子(Hirayoshi, Hiroko)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：50362752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカの雑誌メディアを通して、ファッションと女性性との関係がいかに構築されたのか、その歴史的プロセスを考察するものである。19世紀後半から20世紀前半の女性誌・ファッション誌の言説とイメージを分析し、雑誌におけるパターンの次の役割を明らかにした。すなわち(本誌記事および付録の)パターンは衣服産業を促進するとともに、「モデルに従い、流行に倣う」読者女性たちの新たな振舞いを習慣化させた。雑誌は単に最新流行を伝達したのではなく、衣服制作の知識やパターン消費の手段を教授することによって、近代の女性をファッションの主体的享受者として育成する装置として機能したと言える。

研究成果の概要(英文)：This study examines how fashion and femininity came to be aligned through the text and images in American women's and fashion magazines during the late 19th and early 20th century. The pattern diagrams and paper patterns published in these publications not only helped promote the garment industry and haute couture as a whole, but also served as a new model for women's behavior. In effect, the patterns formed new habits, encouraging women to follow fashion. In addition to conveying fashion-related information, the magazines became an apparatus for establishing women's identities through the consumption of patterns and the making of clothing.

研究分野：表象文化論

キーワード：アメリカン・ファッション 女性像 流行受容 衣服制作 パターン消費 裁縫 型紙

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで19世紀アメリカの女性誌を対象として、近代ファッションにおける流行の生成と受容の問題を考察してきた。平成19-22年若手研究B研究課題(「『ゴディズ・レディズ・ブック』における良き女性とファッションの表象」)では、19世紀前半の女性誌でパリの流行が伝達され、アメリカに流行文化を生成させていく過程を明らかにした。また続く平成22-24年度若手研究B研究課題(「ファッション文化史から見る『お針子』の表象-19世紀アメリカを中心に」)では、19世紀半ばに雑誌の表象として頻出した「お針子」に焦点を当て、衣服生産の機械化と家庭裁縫の促進による流行文化の定着について明らかにした。これらの研究を通じて19世紀アメリカにおけるメディアとファッションの関係を考察してきたが、同時に新たな課題が残された。それは19世紀後半にパリで誕生したオートクチュール(有名デザイナーによる高級仕立服の創造)が、アメリカの既製服産業と女性たちの衣服に関わる経験にどのような影響を与えたのかという問題である。そこで、これまでの研究成果を踏まえた発展的な課題として、19世紀後半から20世紀はじめにおけるパリ・ファッションの受容と同時代の雑誌表象を入念に調査する必要性を確信し、本研究の着想へ至った。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカのファッションがメディアの言説と表象を通じて、いかに「アメリカン・ファッション」として成立させられたのか、その生成の歴史を明らかにするものである。とりわけ19世紀後半から20世紀はじめにかけてのアメリカの主要女性誌・ファッション雑誌におけるパリ・ファッションの受容と改変、そしてファッションにおけるアメリカらしさの言説化と表象の展開を辿ることによって、近代における言説の産物としての流行の生成とそれに伴う女性像の変容を考察する。

従来のアメリカのファッション研究では、パリ中心主義的な服飾史に対してアメリカ独自のファッション史を構築しようとする試みがなされてきた。例えば Caroline Rennolds Milbank の *The Evolution of American Style*(1989) や Rebecca Arnold の *The American Look*(2008) では、ニューヨークの都市化と女性の社会進出を背景として、カジュアルなスポーツウエアが国民的ファッションとして既製服産業において発展し、アメリカ独自のファッション・デザイナーの誕生へと至る経緯を明らかにしている。しかしこれらの研究ではアメリカのファッションの「オリジナリティ」の創出に焦点を当てているため、19世紀以来、

アメリカに受容されてきたパリ・ファッションとの相関関係についてはまとまった言及がなされていない。

そこで本研究では、19世紀半ばから20世紀半ばにかけての女性誌やファッション雑誌を主たる対象として、パリ・ファッションがいかに受容・改変されながら、ファッションにおけるアメリカ的なものが言説化・表象され、「アメリカン・ファッション」の成立へと導かれることになったのか、その生成過程の歴史的解明に次の段階からアプローチする。すなわち<1>女性誌・ファッション雑誌における衣服制作と流行消費はいかに推奨されたのか、<2>家庭内労働としての衣服制作と消費の対象であるファッションはいかに結びつくのか、<3>パリのファッションデザイン(オートクチュール)はアメリカのファッションにいかなる影響を与えたのか。以上の観点から雑誌の表象を読み解くことによって、アメリカのファッションが、雑誌を中心とする自国メディアの言説と表象によって、いかに成立させられ、ある時代の女性像を構築したのか、その歴史的過程を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究はアメリカン・ファッション生成の言説化のプロセスを明らかにすることを目的としている。よって、19世紀から20世紀はじめのアメリカで出版された文献資料が主たる調査対象であるが、同時代の服飾関連資料も実見調査の対象とし、実社会における衣服の制作と流行の変遷を踏まえつつ、雑誌の表象にアプローチする。

まず文献調査に関しては、19世紀半ばから20世紀前半にかけての女性誌とファッション雑誌が主たる対象となる。これまでの科学研究で扱ってきた Godey's Lady's Book のほか、Arthur's Home Magazine, Peterson's Magazine, Lady's Home Journal などの女性誌、ならびに Harper's Bazar, Vogue などのファッション雑誌を主たる対象とし、特にアメリカン・ファッションの言説化の文脈において重要と見なしている1850年代から1910年代までの時代を中心に、経年的な閲覧を実施する。その際、デジタルアーカイヴに収録されている資料に関してはデータベースも活用するが、可能な限り現物の閲覧を優先して原本調査を行う。特に本研究にとって重要な資料態である雑誌付録についてはデータベースに収録されていないことが判明しているため、所蔵機関でのアーカイヴ調査も行う。

また、雑誌の調査と並行して、同時代の服飾関連資料の実見調査を行う。アメリカの服飾資料を多く所蔵するファッション工科大学付属美術館、バード大学大学院付属美術館、ロードアイランド大学付属図書館、

ニューヨーク歴史協会の所蔵品・展示作品を中心とし、19世紀から20世紀前半のアメリカのテキスタイル、服飾作品、写真資料、肖像画、制作道具、パターンなどの調査を行う。また日本国内においては京都服飾文化研究財団の所蔵品を中心に、19世紀アメリカの服飾資料ならびに同時代パリのオートクチュールの服飾を調査する。

これら一次資料の文献調査と服飾調査とともに、19~20世紀アメリカに関する文化史、社会史、また同時代の服飾史、ファッションに関する学位論文、研究論文、学術書籍、一般書籍等の二次資料の調査と収集を行う。先行研究における問題点と議論の整理をふまえた上で、上記の研究目的で示した三つの視点から、メディア表象におけるアメリカン・ファッションの生成過程についての調査と考察を進める。

4. 研究成果

(1) 主な成果

19世紀半ばから20世紀はじめのアメリカの雑誌を家庭裁縫、パターン産業、パリ・ファッションという三つの観点から分析することによって、次の点が明らかになった。

衣服制作のためのパターンは、既製服産業とオートクチュール産業に先駆けて家庭内に流入していたこと、女性たちはパターン消費と衣服制作を通じて「モデルに真似て流行に倣う」振舞いを獲得したこと、

パターンによる衣服制作が高度に発達したアメリカにパリのオートクチュールが取り入れられたこと。これら雑誌のイメージと言説を通じて、近代において女性たちがファッションの主たる主体的な享受者として構築されていくプロセスが明らかとなった。

(2) 成果の概要及び研究論文・発表との対応

19世紀半ばから20世紀はじめのアメリカの女性誌・ファッション雑誌のイメージと言説を、家庭裁縫の推進、パターンの普及、パリ・ファッションの受容という観点から考察した。

まず、雑誌メディアを通じて家庭裁縫はいかに推進されたのか、とりわけパターンによる衣服制作はいつから雑誌に登場し普及したか、という課題に対して、研究発表「モデルに倣うファッションにおけるパターンの出現」(表象文化論学会第10回研究発表集会)にまとめた。(これまでの研究で明らかにしたように、19世紀前半の女性誌において裁縫記事は掲載されなかったのに対して)19世紀半ばの女性誌には、衣服制作の手順と技法、完成スタイルを描いたイラスト、家庭裁縫のためのパターン縮図が掲載されはじめ、また同時にパターン店の情報や広告記事が出現したことがわかった。特に、現存するものは数少ないとはい

え、雑誌付録や通販でパターン(型紙)が扱われ始めたことを明らかにした。

では、19世紀後半のアメリカにおいて、家庭裁縫と流行消費はどのように促進されたのだろうか。この点について、研究発表「パターンによる流行受容 初期『ハーバース・バザー』の重要性」(意匠学会第224回研究例会)にまとめた。(研究論文は『デザイン理論』第28号に掲載が確定した。)19世紀半ばに家庭裁縫は中流階級の女性の価値ある仕事として言説化され、パターンを用いた家庭裁縫の記事が数多く掲載されるようになる。このパターンは、雑誌付録もしくは通販で入手することができた。雑誌には流行商品の情報と広告が多数掲載されるようになるが、女性は「裁縫=衣服制作」のために「パターン」を購入し、家庭内において伝統的仕事に携わりながら消費行動へと導かれる。さらには「パターン」による服作りは、女性たちの「型に倣う」振舞いを習慣化させることになったと考えられる。

次に、19世紀後半に誕生したパリのオートクチュールは、アメリカのファッションにいかなる影響を与えたのかという課題について、研究発表「パターンによる流行受容 初期『ハーバース・バザー』の重要性」にまとめた。19世紀前半からパリの流行情報はアメリカの女性誌の人気特集であったが、19世紀後半のファッション雑誌では、パリのオートクチュールが重要なファッション情報となる。しかしそれらは本物のオートクチュールではなく、あくまでオートクチュールに倣うスタイルであり、普及版スタイルのパターンが雑誌に掲載された。すなわちパターンによる衣服制作が高度に発達したアメリカにおいて、パリのオートクチュールもまた見習うべきモデルとして取り入れられたと言える。

以上の研究を通じて、次の点が明らかとなった。従来の服飾史・ファッション史においては、近代は既製服産業の発展とオートクチュール産業の誕生によって特色づけられるが、両産業の発達に先駆けて、19世紀アメリカでは衣服制作のパターンが家庭内に流入していたこと。そして「パターン」の利用による服作りの習慣が、女性たちの衣服に関わる振舞いを変容させたこと。具体的には、型通りに布を裁ち服に縫う行為が、「型に倣う」あるいは「モデルに倣う」という振舞いの習慣につながったこと。さらには家庭内の衣服制作を通じた「モデルに倣う」習慣が、のちの既製服時代における服の購入、すなわちモデルを選び流行のスタイルを取り入れる女性たちの慣習の形成にスムーズな移行をもたらしたと言える。19世紀後半から20世紀初めにかけてのアメリカの女性誌・ファッション雑誌のイメージと言説を通して明らかになるのは、女性たちがファッションの主たる享受者とし

て育成されるプロセスであった。

以上、アメリカを対象としてファッションと女性性との関係を考察するが、近代ファッションシステムの考察においてアメリカを具体例とすることの有効性について、研究論文「ファッションを語る 雑誌とアメリカ」(Vanitas, No.3, pp.86-96)にまとめた。地理的には広大な国土、歴史的には若い国家、階級的には貴族ではなく市民社会を特徴とするアメリカを軸とすることによって、近代の民主主義・資本主義社会における流行モデルの普及とファッションの大衆化のプロセスが浮かび上がる。従来のパリを中心とする服飾様式史・デザイナー史において重視されてきた芸術家による創造的作品としてのファッションではなく、アメリカにおけるファッションとメディアの関わり、とりわけファッションを言葉として、イメージとして人々に伝えるメディアの力について考察した。

さらに、これまでの研究課題で取り上げてきた近代ファッションにおける諸問題を、アメリカから出発しつつ、日本のファッション史の文脈にまで広げて考察したのが、研究報告「針仕事のポエティックス なぜ服は物語を紡ぐのか」(芸術学関連学会連合第10回公開シンポジウム)である。紡織の機械化、家庭裁縫とファッションの推進の時代における女性像の変遷、布と女性との関係性の変容を、日英米を比較しつつ考察した。

最後に、三年間に渡る研究の成果を「平成25-27年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 メディア表象に見る『アメリカン・ファッション』の生成過程研究」として報告書にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

平芳 裕子「パターンによる流行受容 初期『ハーバース・バザー』の重要性」『デザイン理論』第 68 号掲載確定, 査読有, 2016、頁数未定。

平芳 裕子「ファッションを語る 雑誌とアメリカ」Vanitas, No.3, 2015, pp.86-96.

[学会発表](計 3 件)

平芳 裕子「モデルに倣う ファッションにおけるパターンの出現」表象文化論学会第 10 回研究発表集会、2015.11.7、東京大学、(東京都)

平芳 裕子「パターンによる流行受容 初期『ハーバース・バザー』の重要性」意匠学会第 224 回研究例会、2015.11.21 京都市立芸術大学(京都府)

平芳 裕子「針仕事のポエティックス

なぜ服は物語を紡ぐのか」芸術学関連学会連合第 10 回公開シンポジウム、2015.6.13、京都国立近代美術館(京都府)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平芳 裕子 (HIRAYOSHI, Hiroko)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・准教授
研究者番号：25370167

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし